

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19990

研究課題名（和文）自律学習への足場かけを目指す日本語発音指導の実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study of Japanese pronunciation instruction aiming at scaffolding for autonomous learning

研究代表者

大戸 雄太郎（Odo, Yutaro）

東京国際大学・JLI・講師

研究者番号：70908847

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語学習者が発音の自律学習を行うための発音指導を提供し、日本語学習者の長期的な発音習得のプロセスを解明することである。本研究では、大学の日本語授業中に発音指導を行い、授業期間後3回にわたり発音生成調査、アンケート調査、インタビュー調査を行った。結果として、発音指導を受けた学習者は、多様なリソースを活用しながら発音の自律学習を行っていることが分かった。加えて、長音やアクセントなどの発音が改善した学習者があり、発音習得が進んでいることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、実践研究として発音指導を行った上で、発音の自律学習を行っている日本語学習者の語りから、自律学習に必要な要素を抽出したことにある。その要素とは、発音の理論的知識、発音に対するフィードバック、発音練習のリソースである。発音指導によって、以上の要素を学習者に与えることで、効率よく発音の自律学習が行えるようになる。ひいては、学習者がコミュニケーションを円滑に進められるようになることが期待されるため、学習者の自己実現を支援するという点で、本研究には社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, Japanese pronunciation education to support autonomous pronunciation learning in a Japanese-language class is assessed and the long-term pronunciation acquisition process of learners is elucidated. Pronunciation education was provided in university's Japanese-language classes and outcomes were measured through surveys and interviews conducted three times after the classes. Results showed that learners who received pronunciation education demonstrated autonomous pronunciation learning using diverse resources. This education facilitated pronunciation acquisition, which was evident in some learners' improved pronunciation of long sounds and pitch accents.

研究分野：日本語教育

キーワード：実践研究 質的研究 音声教育 学習支援 発音学習 オンライン授業 eラーニング コミュニケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本語教育では、口頭コミュニケーションの基盤となる「発音」に着目した、日本語の発音指導についての実践研究が不足している。そもそも、日本語を総合的に教える授業の中で、どの程度発音に焦点を当てるかは、個々の教師に任されていることも多い。それゆえ、発音指導が場当たりの指導に留まることや、明示的な指導が行われない場合さえある。その結果、高い日本語能力を身に付けた日本語学習者であっても、発音に問題が残っていることがあり、口頭コミュニケーションが円滑に進められないという問題が生じている。

筆者は、国内外の教育機関で、日本語学習者を対象に発音指導を行ってきた。多くの学習者は、発音指導直後に発音の改善が見られ、発音に対する意識化が進展していることが分かった(大戸2021)。一方で、学習者の発音に問題がなくなるわけではなく、短期間の発音指導に限界があることも分かった。それゆえ、発音習得にとって最も重要なのは、日本語教師による継続的な発音指導を期待するのではなく、日本語学習者が時・場所を選ばず恒久的に継続する自律学習に、発音学習を組み込むことであると考え。そこで、発音指導には、一時的に発音を変化させるのみではなく、学習者が発音学習を続けられるような足場かけが求められている。しかし、どのように発音指導を行えば、学習者が発音の自律学習を行えるかについて、明らかになっていないことが、本研究の開始当初の背景となった。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語学習者が発音の自律学習を行うための発音指導を提供し、日本語学習者の長期的な発音習得のプロセスを解明することを目的とする。目的を達成するために以下3つの問いを明らかにしていく。

問い1. 発音指導を受けた学習者は、その後どのように発音学習を行っていくのか

問い2. 発音指導を受けた学習者は、長期的にどのように発音が変化するのか

問い3. 学習者が発音の自律学習を行うための発音指導とは、どのようなものであるか

## 3. 研究の方法

本研究では、大学の日本語授業中に発音指導を行い、授業期間終了直後、その半年後、その1年後の3回にわたり学習者を対象とした発音生成調査、アンケート調査、インタビュー調査を行った。以下、それぞれ詳しく述べる。

### (1) 発音指導の概要

筆者が行った発音指導については、筆者が所属している大学のゼロ初級の日本語学習者を対象に、Zoom日本語総合授業の時間内に行った。日本語授業は週に8コマあり、合計180時間の必修授業で、教科書は『初級日本語げんき』を使用し、授業中は英語を媒介後として使用している。授業中、筆者が音声教育を行ったのは、主に語彙導入や句型練習の時間であるが、十分に時間が取れた際には、拍リズムの概念を紹介して外来語を使用した練習を行ったり、教科書の会話の録音課題を課したりすることで、限られた時間ながら、学習者が日本語の発音に意識を向けられるよう計らった。

### (2) 調査の概要

調査では、まず、録音課題として、「昨日の試験は難しかったです。」「スポーツの中で、何が一番好きですか。」など、初級レベルの短文を10文作成し、学習者に各自十分に練習したうえで読み上げた音声を録音してもらった。次に、発音学習に関するアンケートに記入してもらい、アンケートの記述を基に、半構造化インタビューを英語で行った。そして、録音課題の評価を、筆者を含む日本語母語話者2名が行った。

本研究の対象者は、筆者が発音指導を行った初級日本語総合授業の学習者から選定した。選定条件は、学期後半に宿題として課した短文録音課題を提出し、授業の出席率が90%以上であることである。当初、調査について同意を得た学習者13名を調査協力者としたが、最後まで調査に参加したのは7名である。内訳は、(1)2021年9月から12月にかけて指導を行った学習者から3名と、(2)2022年4月から7月にかけて授業を行った学習者から4名である。

本研究では、調査によって得られた学習者の音声データと、アンケート・インタビューの文字データ・文字化資料についてそれぞれ質的に分析を行った。音声データは、録音課題の評価を参照しつつ、学習者の音声にどのような特徴があり、どのような変化が見られたかを記述した。文字データは、佐藤(2008)を参考にテキスト分析を行い、分析観点は、学習者が日本語の発音を何のために、何を、どのように学んだかとした。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、これまでに分析して明らかになったことを基に、2. 研究の目的で述べた問いについて答える。加えて、発表した成果に関し、特に関連するものはその情報を併記する。

##### (1) 学習者の発音学習の内実（問い1）

日本語学習者は、発音学習によって音声能力が向上することを期待していた。音声能力が向上することで、日本語をさらに活用できるようになり、日本での生活を円滑にし、言語や文化を深く理解することを望んでいることが分かった。また、授業直後の時点で発音評価が比較的高い学習者は、日本語授業の中で音声項目を認知し、他の領域との関連性を持って音声をつまみ、音声について内省していることが分かった。加えて、日本語授業で得たフィードバックを参照しながら、オンラインリソースを活用して自発的に発音練習を行っていることが分かった。

加えて、授業期間の半年後、学習者が来日し、学習環境が変化する中での発音学習の内実に着目した。学習者は、来日前と同様に、フィードバックを重視し、オンラインリソースを活用した練習を行っていた一方で、来日前に比べ、実生活で日本語を活用する機会が増え、コミュニケーションの機会が増加したとともに、発音学習リソースと日本語のインプットの種類が多様化していることが分かった。日本語授業を履修しなかった学習者もまた、実生活の中で日本語の発音に意識を向けており、日本語学習・発音学習を自分のペースで続けていることが分かった。

そして、授業期間の1年後のデータも加えて分析したところ、多くの学習者がリソースを変化させており、様々な学習方法を試しながら、自分に合った方法を見つけ、発音の自律学習を行っていることが分かった。結果の詳細については研究期間後の発表を予定している。

##### 【発表】

大戸雄太郎（2022年8月）「なぜ学習者はオンライン授業で日本語の発音を学ぶのか」CAJLE 2022年次大会（オンライン）

大戸雄太郎（2022年8月）「初級日本語学習者のオンライン発音学習の内容と方法」第27回留学生教育学会年次大会（立命館アジア太平洋大学）

大戸雄太郎（2022年8月）「Zoom同時双方向型授業の日本語学習者はどのように発音を学ぶのか」第25回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（オンライン）

大戸雄太郎（2023年8月）「オンライン授業後に来日した日本語学習者はどのように発音を学ぶのか」第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（アントワープ大学）

大戸雄太郎（2023年11月）「日本における初級日本語科目履修中断者の発音学習 日本人とのコミュニケーションに着目して」第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（香港大学專業進修学院）

##### 【論文】

大戸雄太郎（2023年6月）「Zoom同時双方向型授業の日本語学習者はどのように発音を学ぶのか」『ヨーロッパ日本語教育』26, 282-293

大戸雄太郎（2024年5月）「オンライン授業後に来日した日本語学習者はどのように発音を学ぶのか」『ヨーロッパ日本語教育』27, 382-394

##### (2) 学習者の発音の変化（問い2）

1年間の学習者の音声データを基に、発音評価がどのように変化するかに着目したところ、2名の学習者の評価値が大幅に変化し、発音が明らかに改善していた。音声項目別に見ると、長音やアクセントなどに改善が見られ、問い1で述べた発音の自律学習の影響であるとも考えられる。一方で、あまり改善が見られなかった学習者にも、発音の変化自体は見られたものの、授業直後から現れていた発音の癖が残っていることが分かった。したがって、発音の自律学習をさらに長期的に行うことが重要であるとともに、学習者の自律性のみには任せるのではなく、教師が継続的に発音に対してフィードバックを与えることの重要性が示唆された。結果の詳細については研究期間後に既に発表済である。

##### (3) 自律学習を行うための発音指導（問い3）

発音指導では、意図伝達の円滑化を目指し、自己実現を支援することに加え、言語文化の理解を目指すことが、学習者のニーズに合っていると考えられる。また、長期的な発音の自律学習を行うために必要な発音指導の要素として、発音の理論的知識を他の領域と関連させながら教え、文字や音声を駆使してフィードバックを与えつつ、一人でも可能な複数の練習方法を提示することの重要性が示唆された。さらに、発音により強く意識を向けさせるために、日本語でコミュニケーションする機会を創出し、日本語の発音が伝わらない経験をさせることが重要であることが明らかになった。このような発音指導の重要性については、上記に述べた発表や論文の中でも主張しているとおりである。

以上を踏まえ、今後も引き続き、本研究で明らかになった、学習者が発音の自律学習を行うための発音指導を提供し、発音の変化を観察していく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大戸雄太郎	4. 巻 27
2. 論文標題 オンライン授業後に来日した日本語学習者はどのように発音を学ぶのか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6. 最初と最後の頁 382-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大戸雄太郎	4. 巻 26
2. 論文標題 Zoom同時双方向型授業の日本語学習者はどのように発音を学ぶのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6. 最初と最後の頁 282-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大戸雄太郎
2. 発表標題 日本における初級日本語科目履修中断者の発音学習 日本人とのコミュニケーションに着目して
3. 学会等名 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大戸雄太郎
2. 発表標題 オンライン授業後に来日した日本語学習者はどのように発音を学ぶのか
3. 学会等名 第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大戸雄太郎
2. 発表標題 初級日本語学習者のオンライン発音学習の内容と方法
3. 学会等名 第27回留学生教育学会年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大戸雄太郎
2. 発表標題 Zoom同時双方向型授業の日本語学習者はどのように発音を学ぶのか
3. 学会等名 第25回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大戸雄太郎
2. 発表標題 なぜ学習者はオンライン授業で日本語の発音を学ぶのか
3. 学会等名 CAJLE 2022 年次大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------